

言語コミュニケーション障害の新しい視点と介入理論

笹沼澄子 編 辰巳 格 編集協力

人間を人間たらしめている言語コミュニケーション機能に、不幸にも障害が生じた場合の不利益は計り知れない。この障害の評価法や、回復の支援に必要な方法の一層の整備は、高齢社会を迎えた今、緊急の課題の1つと言えよう。そのためには臨床場面のみならず、関係諸科学の基礎的研究をも含めた超領域的研究が必要であり、幅広い視点と知識が要求される。本書は読者をこの広領域にわたる研究と実践の最前線に導いてくれる。

本書の特徴を2, 3あげておきたい。第一は理論と実践のバランスを重視する姿勢である。これは編者笹沼澄子氏の編集方針であったのだろうが、どの著者もその要望に十分にこたえている。つまり本書は単なる事実や理論の羅列でなく、事実（神経心理学的事実、心理学、心理言語学的事実、脳神経画像的事実など）と、理論（認知機能モデル、言語理論、脳機能モデルなど）と、介入技法との間の有機的な関連付けを明確に意図している。それが現時点でどの程度成功しているかは、問題領域ごとの研究の進展具合などもあり、一概に判断はできない。しかし本書のこのような方向付けに、評者は深く賛同したい。

特徴の第二は、学際的研究の進展振りがよくみえる点である。「人間の言語機能を解明し、言語治療に役立てる」ことが本書の究極の目的であろうが、それには脳科学から工学、人文科学にわたる超領域的研究が必要であることは自明のことである。本書は、その自

明のことが現実ここまで進んできたかという感慨を与えると同時に、まだまだこれからだという限界、よく言えば将来性にも気づかせてくれる。もう一点、これまで研究の遅れていた意味の問題、すなわち意味処理過程の解明や意味理解の障害に関する最近の研究動向が随所に紹介され、この領域の熱気を伝えている。これも本書の貴重な特徴の1つであろう。

本書が伝える研究と実践の現状を眺めつつ、評者は以下のような感慨と疑問をいだく。…例えば20年前を考えてほしい。このような本が編めたであろうか。否。明らかに研究は大きく進歩した。だからといって現状に満足できるであろうか。できない。では次になにをなすべきか…。本書を精読することにより、熱心な読者には本書の著者らと議論を戦わせた点がきつと山ほど出てくるであろうし、次になすべき研究、次に試みるべき介入方法などがふつふつと思ひ浮かんでくるに違いない。このように本書はきわめて刺激的な本であり、決してマニュアル本ではない。言語はもちろん認知機能全般に関係する研究者、臨床家、学生諸君等々、多くの方々に推薦したい本である。

千葉大文学部教授・心理学 御領 謙

●B5 頁 348 2005 年

定価 6,300 円（本体 6,000 円＋税 5%）

[ISBN4-260-00072-1] 医学書院刊